《松籟》1939 年

激動の時代に小山敬三の画業を支えた人たちがいた

「コレクション展」

小山敬三作品保有会から

2024 年 12/10（火） ▶ 2025 年 3/31（月）

【休 館 日】 3 月～11 月　無休
12 月～3月12日　水曜
年末年始（12/29～1/3）

【開館時間】 4 月～11月　9 時～17 時
12 月～3 月　9 時～16 時

代表作も常時展示中

主催｜ 小諸市教育委員会　小諸市立小山敬三美術館
後援｜ 信濃毎日新聞社　小諸新聞社　東信ジャーナル社　コミュニティテレビこもろ（公財）八十二文化財団　小山敬三美術館友の会

小諸市立小山敬三美術館
Koyama Keizo Museum of Art
長野県小諸市丁 221－3（懐古園内）
TEL 0267-22-3428

小諸市立 小山敬三美術館 KOYAMA KEIZO MUSEUM OF ART

小諸市オフィシャルサイト

「コレクション展」小山敬三作品保有会から

本展について

小山敬三がフランスで絵の修業から帰国した翌年の1929年、茅ヶ崎にアトリエを建てている最中、滞仏中に世話になった神戸の西村旅館館主の西村貫一氏が訪ねてきて小山に作品保有会の構想を持ちかけました。この会は小山の作品に惚れ込んだ西村氏と友人たち12人が小山の作品を買い上げる一方で、他者には絵を売らないというものでした。作品保有会は日本画ではありましたが洋画ではあまり例がなかったようです。

当時小山の実家は製糸会社を経営していて資産家でしたが、1929年の世界恐慌で大きな損失を被ります。

先行きが不透明なこの時に保有会の申し出はありがたいことだったに違いありません。この会は戦争中まで約8年間続き、その間小山は会の支援を受けながら国内外を取材し、1934年に中国へ、また1937年にはフランス人の夫人マリー・ルイーズを伴って再度の訪仏を行なっています。

この時期は世界史上の激動の時代で、日本が戦争へと突き進んでいった時期でもありました。その中にあっても小山が創作活動を続けられたのは、作品保有会によるところが大きかったと思われます。保有会はその後会員も増え、保有作品を集めた展覧会や画集の発行を行なっています。この画集は第4集まで発刊されましたが、関係者の努力によって現在すべてが小山敬三美術館に収蔵されています。この画集に載っている作品は会員の個人所有であったため、一般の目に触れる機会が少ないものでした。また、この中には戦災などによって行方がわからないものも少なくありません。この保有会時代の作品は会以外に出ることはありませんでしたが、同じモチーフの関連作品が小山のアトリエや実家に残されていたり、戦後館蔵品となったりした作品があります。今回はこの画集に載っている作品や、その関連作品を館のコレクションから選んで展示しました。

激動の時代に描かれた作品ですが、その多くが不思議な静けさを持って見る者にせまってきます。

2024年12月

画集No.4には《湖畔》と題して同じ題材の10号の作品が載っている。美術館所蔵の絵には点景として赤い女児の洋服が描き込まれている。この年の前年太平洋戦争が始まっているが、絵に重苦しさは感じられない。

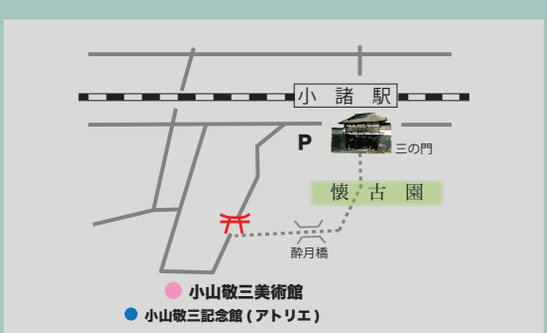
「湖畔」　1942年

「カーニュの丘（南仏）」　1938年

フランスからの絵の修業から帰って9年目に作品保有会の後援で再度渡仏した時の作品。この旅でヨーロッパの風景を懐かしく思っていた小山は水を得た魚のように各地を訪ねて多くの作品を残した。

「志摩の海女」　1935年　　作品保有会画集No.1(1936年)より

Access



電車　しなの鉄道またはJR小海線　小諸駅下車徒歩10分

車　上信越自動車道小諸インターから10分

小諸市立
小山敬三美術館
KOYAMA KEIZO MUSEUM OF ART